

オリンピック・パラリンピック競技大会のテストイベントの経験が 大会後に競技の発展をもたらす可能性

トップスポーツマネジメントコース

5017A311-1 佐藤 直

研究指導教員 平田 竹男 教授

1. 研究の背景

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会）の開催に向け、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と各中央競技団体（以下、競技団体）は、東京大会を想定したテストイベントの準備を進めている。テストイベントの開催は、Olympic Charterにも運営機能のテストを目的として実施することが記載されている。

2012年のロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、ロンドン大会）では、2011年5月から2012年5月までの13ヶ月間に、テストイベントとして42大会が開催され、本番会場での運営機能テストが実施された。

更に、イギリス国内では、2011年のテストイベント42大会を含め、各競技の世界選手権大会をロンドン大会後にも開催するなど、スポーツムーブメントを継続する動きが見受けられる。

しかし、テストイベントにおけるリスクマネジメント上の役割や、ロンドン大会後の施設利用に関する研究はあるものの、大会後の競技の発展へ良い影響をもたらす可能性に関して、述べられている研究は見当たらなかった。

これらを踏まえ、ロンドン大会を参考に、オリンピック・パラリンピック競技大会のテストイベントにおける運営機能テスト以外の役割を明らかにすることは、オリンピック・パラリンピック競技大会のスムーズな運営と成功のみに留まらず、オリンピック・パラリンピック競技大会後の競技の発展及びスポーツムーブメントの継続という観点で、有用な情報を提供すると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、オリンピック・パラリンピック競技大会のテストイベントの経験が、本大会後の競技の認知度向上及び競技団体の国際大会開催力向上をもたらす可能性をロンドン大会のテストイベントを事例に検証する。

3. 研究方法

1) 調査対象

インターネットに公開されているロンドン大

会のテストイベント42大会の情報、ProQuest Centralに収められているイギリス国内新聞のデータ、ロンドン大会後にイギリス国内で開催された世界選手権大会及び国際大会の情報。

2) 分析方法

(1) テストイベントをロンドン大会組織委員会（以下、LOCOG）が主催したオリンピック競技の大会（以下、LOCOG大会）、競技団体が主催したオリンピック競技の大会（以下、競技団体大会）、パラリンピック競技の大会に分類した。

(2) イギリス国内における2000年の競技別新聞掲載件数を基準値100と定め、テストイベント開催前、テストイベント開催期間、ロンドン大会後の競技別新聞掲載件数を指数化し分析した。

(3) ロンドン大会後の世界選手権大会の開催競技を調査した。

(4) イギリス国内の自転車競技における国際大会の開催、競技登録者数及び収入を分析した。

4. 研究結果

1) ロンドン大会のテストイベントには、LOCOG大会、競技団体大会、パラリンピック競技の大会が存在した。さらに競技団体大会には、大会スポンサーを競技団体自らが集めた大会(A)とLOCOGに委ねた大会(B)に分類できることが分かった。分類別に運営組織を表1に示した。

表1 テストイベントの各項目における運営組織

分類	イベント運営	スポンサー集め
LOCOG大会	LOCOG	LOCOG
競技団体大会	A	競技団体
	B	LOCOG/競技団体
パラリンピック競技の大会	LOCOG	LOCOG

2) テストイベントを実施した全競技の新聞掲載件数の指数は、テストイベント開催前(106)、テストイベント開催期間(152)、ロンドン大会後(121)となり増減があった($F(2)=3.07$, $p<0.05$)。

テストイベント開催期間に増加し($t(40)=2.02$, $p<0.05$)、ロンドン大会後に減少したものの($t(40)=2.02$, $p<0.05$)、テストイベント開催前と比べ増加した($t(40)=2.02$, $p<0.05$)。

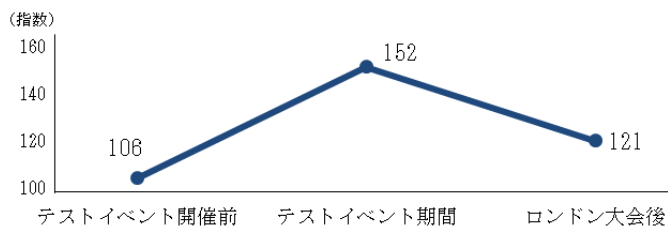


図1 全競技の新聞掲載指数の3点比較

競技別では、自転車がロンドン大会後に減少させたものの、最も高い指数の700以上を維持していた。また、ロンドン大会後に最も微減で留めた陸上（マラソン/競歩）と射撃は、2000年と比べ増加させていた。上記4競技は、テストイベントをいずれも競技団体大会Aで実施していた。

一方、ロンドン大会後に最も減少させたビーチバレーと水泳（シンクロナイズドスイミング）は、テストイベント開催期間に増加させたものの、ロンドン大会後に2000年を下回る数値に減少させた。いずれも競技団体大会Bであった。

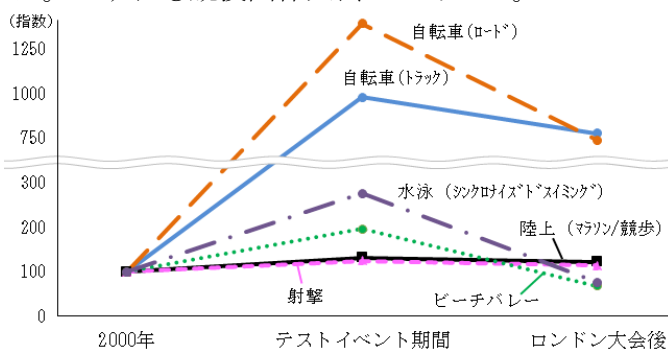


図2 競技別新聞掲載指数の3点比較

3) ロンドン大会後の2013年から2017年の5年間に、イギリス国内で開催された世界選手権大会或いはワールドクラスのスポーツイベントを調査し表2に示した。その中でも、陸上はオリンピック競技、パラリンピック競技の両世界選手権大会が同一の組織委員会によって運営されていた。

表2 ロンドン大会後の世界選手権大会の開催状況

分類	開催競技数
LOCOG大会	18競技中1競技
競技団体大会	18競技中7競技
パラリンピック競技の大会	6競技中2競技

4) 自転車競技では、ロードレースのテストイベントが、ロンドン大会後も継続的に開催されていた。また、競技団体は、オリンピック・パラリンピック競技大会のメダル獲得数、競技登録者数、収入の各分野で増加していることが分かった。

5. 考察

1) テストイベントをオリンピック・パラリンピック競技大会の運営機能テストとしてみれば、主催した運営組織の違いに依らず、その目的達成は可能であると考えられる。

2) テストイベントは、新聞掲載件数を増加させ、オリンピック・パラリンピック競技大会の機運醸成に繋がる。競技によっては、大会後もメディアの関心を維持することで、競技の認知度向上に寄与する可能性があると考えられる。

3) 競技団体自らの大会でテストイベントを実施した経験は、オリンピック・パラリンピック競技大会後の国際大会の招致及び開催、競技団体によるスムーズな大会運営を可能にすると考えられる。また、陸上のオリンピック競技、パラリンピック競技の両世界選手権大会の開催において、時期・場所・運営で大会後に良い影響が見られる。

4) ロンドン大会後の新聞掲載件数において、自転車競技の数値が高かった。イギリス国内において自転車競技は、勝利・普及・資金の各分野で好循環を作り、注目に値する競技になっていた。

5) 上記を踏まえ、テストイベントは、表3の運営機能テスト(I)に加え、オリンピック・パラリンピック競技大会の機運醸成(II)に寄与する役割と言える。さらに、(I)、(II)を競技団体自らが開催し、スポンサー集めに取り組んだ大会で実施した競技の中には、自転車競技のようにオリンピック・パラリンピック競技大会後の競技の認知度向上や国際大会を招致及び開催する力に繋がる可能性があると考えられる。

表3 競技発展へ繋がるテストイベントの3段階

内容	
I	Field of play テクノロジー (timing、scoring、resultsのシステム)
	会場マネジメント 競技スタッフ、ボランティアを含む要員のチームビルド 輸送、セキュリティ他の大会実施要件
	メディアの関心
↓	
III	競技の認知度向上 (ファン作り、コンテンツ力強化) 競技団体の国際大会開催力向上

6. 結論

本研究により、オリンピック・パラリンピック競技大会のテストイベントは、メディアの関心を集め、競技の認知度向上に寄与する可能性があり、その中でも大会組織委員会に委ねず、競技団体自らがテストイベントを開催した競技には、その経験が国際大会を招致及び開催する力を与える可能性が示唆された。特に、イギリスの自転車競技は、テストイベントを契機に拡大を続けている。競技団体自らが運営やスポンサー集めを手掛けることで、その経験をもとにオリンピック・パラリンピック競技大会後の国際大会の開催や競技者数の増加につながった例は注目に値する。